

「帆を上げよ、高く」

本作品は、同志社グリークラブの110周年記念に男声合唱曲（2014年）として誕生（初演指揮は私）しました。その後、法政アカデミー合唱団によって混声委嘱されたものを今回東京混声六連の合同で再演するということとなります。曲の内容は、一般化されるためにオペラートに包んではおりますが、同志社グリークラブの記念委嘱ということで、同志社グリークラブとしてのゆかりのテーマを扱っております。

■「翼よ、お前の空を翔ける」

同志社の校風である「自由」をテーマに描いています。空を翔けるもの動感や速力を感じさせる無窮的な律動を持って、サウンドスケープ的な音楽が描き出されています。

■「春愁のサーカス」

私の師匠であり、同志社グリークラブ全体の師匠でもあった偉大なる音楽家、福永陽一郎氏へのオマージュそのものとなっています。

■「帆を上げよ、高く」

新島が志を持って海を渡ったのは21歳、ちょうど今の現役大学の世代です。志をもって社会へ船出しようとする若者への高らかなる応援歌として作られています。新島が卒業生のために送った言葉「Go Go in Peace A Mysterious Hands will guide you」が2度出てきます。

この曲に纏わるエピソードを紹介します。

今を遡ること30余年前ですが、私（伊東）は85回目の同志社グリークラブの定期演奏会の舞台に学生指揮者として緊張して立っていました。結果としてそのステージが福永陽一郎の最後のステージになった演奏会です。それを客席で聞いていた一人の中学生は、ちょうどトランペットを習い始めていたのですが、福永陽一郎の指揮する「岬の墓」の演奏を聴いて大きな感動と自分の音楽の道が開けていくのを感じました。しかしそれ以上の衝撃として、隣の客席で号泣する大人を見て、その姿が「ある種の尊い人生と音楽の謎・・・」のようなものとして引っかかっていたそうです。そこまで突き動かすものは何なのか、演奏中に泣けるということはどういうことなのか、という問いが25年間胸を離れなかったということでした。25年後、当時の中学生は音楽家になっていたのですが、110周年の同志社グリークラブの演奏会に福永陽一郎編曲、そして福永陽一郎のペンネームである安田二郎作詞の「十の詩曲（シヨスタコーヴィチ作曲）」があることを理由に、東京から京都まで新幹線に乗って足を運んでいました。実に25年ぶり2回目の同志社グリークラブの定期演奏会です。そして演奏会后、かつての中学生は私の楽屋に来てくれました。

彼は、委嘱新曲があることを意識せずにはるばるやってきた同志社グリークラブの演奏会で、その委嘱曲の2曲目を聞いて思わず号泣してしまったこと、25年前に自分の隣の席で

号泣した大人のように、不意にあふれた涙を堪えきれなかったことを伝えに来てくれたのでした。

2曲目とは「春愁のサーカス」。作詩をした私が作曲家とのやり取りの中でパーソナルなものを出来るだけ違う言葉に置き換え、一般的なイメージの中に封じ込めた歌詞を持つ曲でした。パーソナルなものとは、紛れもなく福永陽一郎の思い出と憧れと別れです。

かつての中学生は祖母にこのようにメールをしたのです。

「おばあちゃん、けいしさんが、『春のピエロ』って歌詞を書いていたよ」

おばあちゃんとは福永陽一郎夫人の暁子さん。

かつての中学生とは、今は音楽家として東京で活躍されている福永陽一郎のお孫さんの小久保大輔さんでした。この再会は、私が福永先生の死後、藤沢のお宅に1週間も泊り込んで荷物の整理をしたとき、毎日近所のファミレスでご飯を食べさせていたシャイな中学生との再会だけではなく、福永陽一郎とその音楽に謎や深い衝撃を得ていた頃（学生時代の）の私たちの気持ちとの再会でもあったとも思います。

「帆を上げよ、高く」は、その後小久保大輔氏と法政アカデミー合唱団によって混声合唱曲に生まれ変わり、初演されました。今回は、東京の六大学混声合唱団の合同曲として再演されることとなります。

伊東恵司